

## 〈資料紹介〉名古屋城の刻印・刻銘（その1）―川地義郎氏寄贈資料について―

大村 陸・服部 英雄

### キーワード

石垣 刻印 刻銘 川地義郎 石垣普請 丁場割図 石垣修理

### はじめに

名古屋城の石垣には刻印や刻紋と呼ばれるマークや大名家臣の名が刻まれた刻銘がみられ、築城時の情報を今も直接的に知ることができる資料として注目できる。

これまで名古屋城の刻印・刻銘についての体系に調査には高田祐吉氏が知られており、刊行物も複数あるが（高田一九八九・一九九九・二〇一三）、同時期に調査を行っていた人物として川地義郎氏がいる。川地が採拓した石垣の刻印・刻銘の拓本資料は名古屋城総合事務所と名古屋市博物館に寄贈されており、本稿ではこのうち名古屋城の所蔵資料について紹介する。（大村）

### 川地義郎氏資料の概要

川地義郎氏は元名古屋市職員で、名古屋城管理事務所に配属され、庭師・守衛として業務していた。昭和五十年代初めに退職しており、故人である。

川地氏は名古屋城の刻印・刻銘を自身で採拓した膨大な拓本資料を所有しており、昭和五十年（一九七五）前後に名古屋城管理事務所（現・名古屋城総合事務所）と名古屋市博物館にその資料を寄贈している。資料の全数はおよそ八百点に及び、一部は軸装されているが、大半が半紙のまま無造作にまとめられ保管されており、未整理の状態となっている。それぞれの所蔵資料としては、名古屋城総合事務所が軸装七幅、未装二十六枚、刻印を撮影したネガフィルム二十四本、刻印調査のメモノート二冊、その他の拓本未装七枚を所蔵している（昭和四十九年（一九七四）三月八日寄贈）。名古屋市博物館では、軸装二十幅、未装七百八十一枚、その他の拓本軸装二幅を所蔵している（昭和五十年（一九七五）頃に寄贈）。

名古屋市博物館所蔵資料（以下、「市博資料」という）と名古屋城総合事務所所蔵資料（以下、「名城資料」という）の双方に同一の刻印・刻銘があることから、同じ箇所複数枚採っていたことがわかる。市博の軸装資料には採拓地の情報はほとんど記されていないが、名古屋城の軸装資料には採拓地が記録されており、資料的価値の高さを指摘できる。これらのことを踏まえて、名城資料を内部の受入番号順に紹介していく。（大村）

名古屋城所蔵の川地義郎氏採拓拓本

1 石垣拓本「はちすか内いなミ与太郎」(図1)

軸装：縦一三四・五 cm、横三九・五 cm

本紙：縦五二・三 cm、横三二・五 cm

巻止部分に貼付けがあり、「東北隅櫓や、西の下石垣 3 はちすか内いなミ与太郎 昭和四十九年三月八日」と記されている。市博資料にも同一箇所拓本資料があり、採拓の角度などもほぼ同じである。「いなミ」は「いなた」(稲田修理亮示植)が正しい。

2 石垣拓本「山内左太」(図2)

軸装：縦一二一・五 cm、横四一・〇 cm

本紙：縦四〇・〇 cm、横三〇・五 cm

巻止部分に貼付けがあり、「西之丸西側石垣中段(うの首南) 1. □山内左太」と記されている。

3 石垣拓本「三葉柏紋とうずまぎ紋」(図3)

軸装：縦一二〇・五 cm、横六五・〇 cm

本紙：縦三三・〇 cm、横五七・五 cm

巻止部分に貼付けがあり、「東南隅櫓東の堀北へ西側石垣中程 5 (三葉柏紋) 字あり(うずまぎ紋) 松平土佐守の紋」と記されている。

4 石垣拓本「すミはせ川」(図4)

軸装：縦一四一・〇 cm、横五五・九 cm

本紙：縦六五・五 cm、横五一・〇 cm

巻止部分に貼付けがあり、「東北隅櫓や、西の下石垣 2 (丸の内に二つ引両) すミはせ川」と記されている。

5 石垣拓本「松平土佐守」(図5)

軸装：縦一四四・五 cm、横六四・二 cm

本紙：縦五三・六 cm、横五〇・七 cm

巻止部分に貼付けがあり、東南隅櫓東の堀北へ西側石垣中程 4 松平土佐守」と記されている。

6 石垣拓本「林 阿波守内」(図6)

軸装：縦一二七・五 cm、横四三・一 cm

本紙：縦四五・三 cm、横三二・五 cm

巻止部分に貼付けがあり、「西鉄門北うの首東側下石垣 7 林阿波守内」と記されている。

7 石垣拓本「阿波守内林内膳組」(図7)

軸装：縦一四四・三 cm、横三九・八 cm

本紙：縦五九・二 cm、横三三・六 cm

巻止部分に貼付けがあり、「西鉄門北うの首東側下石垣 阿波守内 □林内膳組」と記されている。

8 石垣拓本「松平土佐守Ⅲ」(図8)

未装：縦一二五・五 cm、横六〇・三 cm

名城資料では唯一未装で一点として登録されている資料で、寄贈者も「川地義郎?」となっている。ただ、市博資料に同一箇所拓装された拓本があるため、川地義郎資料として間違いないと思われる。

9 石垣拓本資料一式(図9～11)

未装：縦三三 cm、横二四 cm × 二十枚

縦五四 cm、横三二 cm × 二枚

縦六八 cm、横六八 cm × 三枚

これまでの軸装のものと比べて小ぶりの刻印のみの拓本が一式で受け入れられている。このほか、詳細は未確認だが石垣（おそらく刻印・刻銘）を撮影したネガフィルム二十四本、城内石垣を巡りながら一m単位でどの刻印があるのか記録（おそらく一部）したノート二冊が寄贈されている。石垣とは関連がないが、陸軍期の碑文「増築射ち出碑」の拓本、葵紋の瓦当の拓本資料も一式に含まれている。（大村）

### 石垣修理碑の拓本について

江戸時代後半、文化二年（一八〇五）の御深井丸修理碑拓本があり、同じ拓本が名古屋博物館・名古屋城総合事務所双方にあって、後者の墨色が濃い。碑文は『金城温古録』御深井丸に収録され、知られた史料のはずだが、周知されているともいいがたい。

風化のため文字が薄く、川地拓本でも読みづらい（図12）。奥村が藩命を受けたのが文政年間（一八一八〜一八三〇）とすれば、碑文は彫られて年が浅く、はるかに鮮明だったと考えられる。『金城温古録』銘文は記録として貴重である。

碑文所在地には説明版もなく、碑文の所在に気づく人は少ない。『金城温古録』に「御深井丸南土居東端芝坂の辰巳の所を入隅に築ける北側の石垣の面長三尺巾二尺はかりの石に彫刻せる字あり主宰御作事奉行の記なり」とあった。御深井丸透門通路（俗称「鵜の首」）を北に渡って左方（西方）、土居上り口、手前側に低い段があり、その入隅石垣（北西隅）、樹根の下に銘文石がある（図13）。

『金城温古録』では松下□之右衛門の名が脱落となっている。「以下日

雇の頭なり」とある注記は拓本にはない。注記は金城温古録東洋文庫本（草稿本）とその写しである鶴舞本にあって、蓬左文庫本（清書本）やその写しである名古屋城本には記述がない。注記だったため浄書の際に割愛したと考えられる。東洋文庫本は安政五年までに成立しており、該当箇所は得義自筆である。WEB閲覧できる鶴舞本はモノクロで、墨色を異にするため朱墨かと推量する（東洋文庫本もモノクロ写真によった）。

石垣北上巾十七間、及、東上巾十五間破損、加重修也、北東隅下巾四間半、高三間者無傾危、不及修繕  
文化二乙丑歳七月

黒田文右衛門

杉浦忠太郎

小山清兵衛

天野佐助

鈴木五兵衛

加藤治平

松下□之右衛門

津村源吾

鷺見只八

羽田野弥三郎

井上長兵衛

大工

藤右衛門

治右衛門

半四郎

太兵衛

鉄四郎

修理箇所の記事については難解だが、対象地は北上巾十七間と東上巾十五間の破損箇所、ただし隅角は高さ三間、幅四間半は「傾危」がないため、積み直しをせずにそのままにして修理しなかった、と書かれている。

修理の履歴・箇所がわかる石垣は少ないので、貴重な記述である。この前年七月頃に大型の台風が尾張、三河から美濃・飛騨にかけて通過した。『名古屋城石垣災害・補修一覧』（平成一四年度名古屋市教育局文化財保護室・名古屋城管理事務所）に関係史料があり、「朝日村誌」、「桜井村史」、「三河國西加茂郡誌」、「飛騨編年史要」などに記述の被害記事が見える。災害が八月二十八日発生だったことは「三河國西加茂郡誌」、「飛騨編年史要」に見える。修理については「尾張徳川家系譜」『名古屋叢書』三編1巻（御系譜）（二六二頁）に

一文化元子八月廿八日、尾州御石垣孕或崩候付而御築直之儀御達有之候処、如元御修補候様二との奉書出ル

とある。この日付は災害で石垣が孕み、崩れた日である。修理の方針が決定、幕府の承認もなされて、翌二年七月に竣工した。御深井丸石垣はこの修理工事のおそらく全てであろう（なお右記修理一覧にはこの文化二年修理碑文は記載されない）。

位署者冒頭の三人が普請奉行で、つづく八人はいずれも苗字があり士分である。下段は上から続く訳ではなく別記で、全員苗字がない。藤右衛門には碑文に小さく「大工」と注記がある。続く四名に奥村得義が「以下日雇の頭なり」と注記した。治右衛門、半四郎、太兵衛、鉄四郎の頭

四人の配下に「日雇」がおり、彼ら「日雇」が石垣を実際に築いた。「日雇」は名古屋地方に「ひよかた」「ひよとり」「ひよたび（地方足袋）」という言葉が残っている。【本紀要 服部4-2日雇・黒鉄を参照されたい】（服部）

#### おわりに

石垣刻印については高田祐吉氏の研究蓄積が著名であるが、高田氏と異なつて川地義郎氏は著書を刊行しなかった。同時代に二人が同じ作業を行なっていたことはほとんど知られていない。川地氏は通常の拓本という方法だったが、高田氏は独自の方法で字形を読みとっている、というちがひがある。前者には主観が入りにくい。後者は読みやすいが、読み取った形を取るから、客観性は若干弱くなる。

名城資料には川地氏採拓紙が、軸装のもの、額装のもの、一枚もので未表装がある。また川地氏以外にも長谷川甫斉氏採拓の天守・東南隅櫓・西南隅櫓木材の拓本二軸があり、やはり軸装されている。天守台の加藤清正関係の拓本もあるが、その採拓者は不明である。

川地氏は野帳も残しており、整理できれば拓本採拓地も確定できるが、これには相当な時間を要しそうである。今回は名城資料の一部の報告にとどめるが、今後も継続して名城資料と市博資料の整理・報告を行っていく。（服部）



## 註

(1) 各資料名については巻止めに書かれた記載のママである。

## 参考文献

高田祐吉 1989 『特別史跡名古屋城天守台石垣の刻紋』財団法人名古屋城振興協会

高田祐吉 1999 『続・名古屋城叢書2 名古屋城石垣の刻紋』財団法人名古屋城振興協会

高田祐吉 2013 「名古屋城の丁場割と石垣の刻印」『新修名古屋市史 資料編 考古2』名古屋市

《Title》

Marks and Inscriptions on Nagoya Castle (Part 1) - Materials donated by Mr. Kawachi Yoshiro

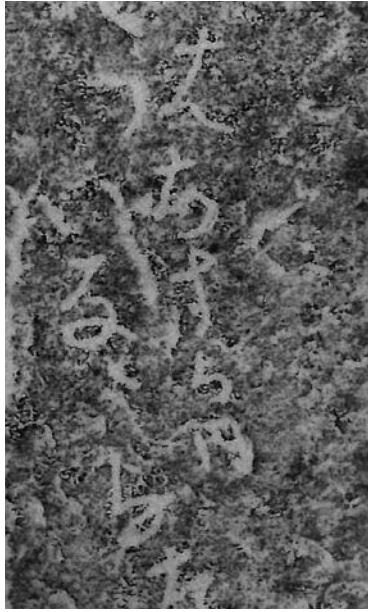


図1 石垣拓本「はちすか内いなミ(た)与太郎」



図2 石垣拓本「山内左太」



図3 石垣拓本「三葉柏紋とうずまき紋」



図4 石垣拓本「すみはせ川」

(図はすべて任意縮尺)

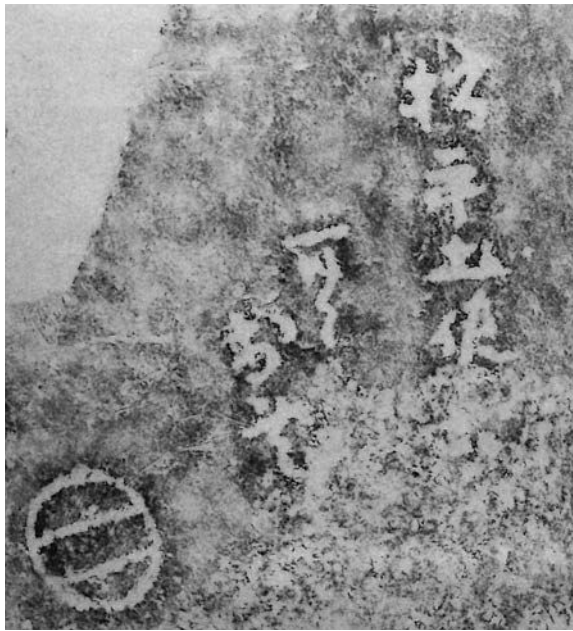


図5 石垣拓本「松平土佐守」(百々出雲)



図6 石垣拓本「林 阿波守内」



図7 石垣拓本「阿波守内林内膳組」



図8 石垣拓本「松平土佐守」





図9 石垣拓本資料 一式①



図10 石垣拓本資料 一式②

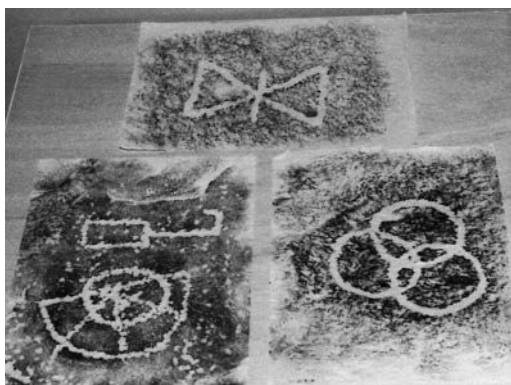


図11 石垣拓本資料 一式③



図13 文化二年石垣修理碑現況



図12 文化二年石垣修理碑拓本資料（名古屋城総合事務所所蔵）